

平安時代の宮廷人は、外出の折節、牛車を用いた。清少納言は、とりわけ牛車が好きであつたらしく、牛車で野や原までも屢々巡り、スピード狂の趣きすら感じさせる。『枕草子』には、車の屋形に飛び込んでくる木の枝を急ぎ手折ろうとして、残念にも果たせなかつたこと、蓬が輪に絡まって、輪が目の前を過ぎると爽やかな香りを運んでくれること、松の煙の香を放つて、松明のあかりで暗闇を疾駆するおもしろさ、月の明るい夜、川の中を行くと牛が飛沫をあげ、それは水晶の碎け散る美しさであることなど、牛車に乗つての心ときめく話題が、数多く筆にとめられている。清少納言は、牛車の軽快なスピードによつて浮き立ち、無邪気さが大きく揺り動かされたかのようである。

牛車の牛を扱い、先導役をつとめる者を「牛飼童」と呼ぶ。清少納言の乗つた牛車にも徒歩の牛飼童がおり、牛の鼻輪をとつていた。清少納言は言う

牛うし

飼かひ

童わらは

——「牛飼は、おほきにて、髪あららかなるが、顔あかみて、かどかどしげなる」と。髪質までも注文するのは、縮毛なる己れへの凝視の裏返しであるうか。それは兎も角として、そこに描かれる牛飼の望ましい有様は、腕力と才気を合わせ持つた屈強の男性である。しかし、牛飼は、頭髪を長く伸ばし、本来なら十五歳の元服で冠を着けるはずが、烏帽子もかむらず、童子姿の出で立ちをとる。牛飼は、少年とは限らないものの、姿は少年で「牛飼童」と呼ばれる習わしなのであった。りっぱな大人が、子どもの姿をする職種なのであった。

六畜を飼うことを牧すといひ、牧畜社会では古来から、少年の労働力に多くを負うてきた。しかし、その故にもまして、牛車の牛は牡牛であり、かつ去勢牛だつたと考えられるところから、牛飼童は牛と同型の「幼年成体」を徴づけられた「童子」を生きる職能と考えられたのではなかつたらうか。(美)